



URL <http://www.pippo.co.jp>
Email pippo@diana.dti.ne.jp

ピッポ新聞

2003

12

No.182

子どもの本専門店

年間購読料（送料込み）1500円

編集・発行 伊藤俊男

ピッポ

〒424-0886

静岡市清水草薙1-6-3

TEL & FAX

0543-45-5460

今月は本ばっか

さて、思いつくまま、気付くまま、ついでに目に付くままに、（つまり、なんの脈絡もなくということですが）今月は本の紹介を中心に書いていきます。

最初に紹介する2冊は復刊ドットコムで、復刊の要望が高かった童話だそうです。『クリスマスプレゼント』は、旺文社から出版されていたもので、『いたずらロバート』は、ほるぷ出版から出ていました。どちらも奇想天外な物語で、普段本に親しんでいない子でも読んでやったり、紹介してあげれば楽しめると思います。勿論、楽しい本を探し求めている子にも一押しの本です。（1年生〜3年生ぐらい）

『クリスマスプレゼント』（スズキコージ・作 1312円 ブッキング）

三十数年前、コージさんが冬のヨーロッパを旅

したときのイメージを

もとに創作した絵童話

メリーさんは雪だるま

たちの後を追って、気

がついたら、プレゼント

ンおじさんたちの住

んでいるところだった

プレゼントンおじさんのおじさんがサンタクロースだったんだ。イブの夜メリーさんも一緒にプ



レゼントを積んだソリに乗った……。『いたずらロバート』（ダイアナ・W・ジョーンズ・文 エンマー・C・クラーク・絵 槇朝子・訳 1575円 ブッキング）

ヘザーは両親とメイン館という由緒有る館に住んでいます。両親はここに見物にくる人たちの案内をしながら、管理しているのです。この館には魔法使いの「いたずらロバート」が土の中に閉じこめられていたというのです。ヘザーはあるときこの「いたずらロバート」を目覚めさせてしまったのです。350年振りに現れたロバートは、今と昔の区別がつかずに、魔法を使って大騒ぎになります。でも、歴史を調べると、ロバートにも可哀想な過去があったのですが……。

次も二十年振りの復刊の絵本です。

『クリスマスイブ』（マーガレット・W・ブラウン・文 ベニー・モントレソール・絵 やがわすみこ・訳 1470円 ほるぷ出版）

クリスマスといえば、なにやらプレゼントや、

パーティーなどと言

う喧噪だけが目に

つきますが、静かな

中に、子どもたちの

緊張感や期待感が伝

わってくるのが、この絵本です。イブの



夜、家中が寝静まった中で、4人の兄弟は興奮で眠れません。両親が寝静まって真つ暗な中を、4人はそつと階下にツリーを見におりていきます。暖炉の残り火の中に、プレゼントやツリーが静かに映し出されます。

外からは、おとなたちの歌うクリスマス歌の歌声が静かに伝わってきます。満足した子どもたちは、またそつと子供部屋へ戻っていくのです。

この絵本は、静かに、そう、静かに読んでもあげると良いね。次は、少し昔のチロルの人々の冬のくらしを伝えてくれる絵本です。

『山のクリスマス』(ルドウィヒ・ベールマンス・作 光吉夏弥・訳編 924円 岩波書店)

この本はアメリカで1934年に出版されたもので、日本では1953年に「岩波の子どもの本」のシリーズとして最初に出版された中の一冊です。何度目かの復刊ですが、この9月に再び(?)復刊されました。随分長く読まれてきた本です。

内容は街に暮らす男の子ハンシが、クリスマス休暇を利用して、山の監視人をしている叔父一家の所で過ごした様子が描かれています。



しいイタズラをする様子や、チロルの山の

人々の素朴な暮らしの様子など、素晴らしい自然を背景に、暮らし人々の好ましい生活振りが主人公を通じて伝わってきます。作者ベールマンスは「マドレーヌ」のシリーズが有名です。

古い時代の絵本といえはぐーんと古く、今度は150年も前に戻ってしまおうか。ほるぷ出版の「ほるぷクラシック絵本」というシリーズの一冊で、『もじやもじやペーター』という絵本をご存知ですか。この絵本、ドイツのお医者さんのホフマンさんが、自分の子どものクリスマスプレゼントに絵本をさがしたが、良い絵本が見つからなかったで、自分で描いて贈ったのがはじまりだといひます。

『もじやもじやペーター』(ハインリッヒ・ホフマン・作 ささきたづこ・訳 2310円 ほるぷ出版)

1845年に出版されたもので、当時は石版の印刷です。



一冊の絵本の中に6つのお話があり、内容はいづれも子どものイタズラなどを戒めるもので、話自身はあまり面白とはいえませんが、出版されるや大人気ですぐ千五百部が売れ、早くも2年後にはイギリスで出版されたいひいます。理由は絵に負うところが大きかったよう

で、その絵はオーバーにオバーに表され、そこにナンセンスの世界が表出され、それが子どもたちの心を捉えたといひことひです。今でもアメリカ・ヨーロッパで出版され続けていますが、この日本語版は、2002年に重版されたものでひです。ピッポには英語版の古書絵本も2冊ありひます。(興味のあり方はお問ひ合せ下さい)

チエーホフ、トルストイ、ドストエフスキーなどの名前を上げるまでもなく、ロシアの文学・芸術は質・量ともに世界に誇るべきものでひです。ところが、ソビエト崩壊後というもので、どうも私たちはロシアを一段低く眺める傾向が有ひませんか?とんでもない!イデオロギー的にはどうか知りませんが、かの国の芸術的伝統は今も立派に子どもの本にも受け継がれてひるひです。それは名作の『てぶくろ』(ラチヨフ 福音館書店)を見ても明らかひことひです。今度はそのロシアの新刊絵本を紹介しひしよう。

『きつねとうさぎ』(ロシアの昔話 F・ヤールブソフ・



絵 Y・ノルシュティン・構成 こじまひろこ・訳 1260円 福音館書店

キツネとウサギが隣同士で住んでひます。冬、氷で作った真つ白できれいな家を自慢してひいたキツネでしたが、春になるとそれ

は溶けてしまいました。そこで木の皮で作ったウサギの家を奪って、ウサギを追い出してしまいました。途方に暮れているウサギを次々に助ける動物が出てきて失敗をくりかえすのですが……。この絵本のコンビは「きりのなかのはりねずみ」など現在ロシアの人気映像アニメ作家コンビ。

『ハリネズミと金貨』(V・オルロフ・原作 オリシヴァング・絵 田中潔・訳 1470円 偕成社)



ハリネズミのおじいさんが森で金貨を拾います。それで冬越しのためにキノコを買おうとおもいます。ところが、出会ったリスがたくさんキノコをくれます。こうして

森の動物たちはおじいさんが冬越しに必要な物を無償で分けてくれます。それで、おじいさんは金貨を誰かのためにと元の所へ戻したのでした。お金がすべてという風潮の現代の世の中で、人びとが助け合って生きていく社会を思い出させてくれる一冊。

『金のさかな』(ロシアの民話 A・プーシキン・文 V・ワシーリエフ・絵 松谷さやか・訳 1470円 偕成社)

貧しい老夫婦が海辺で暮らしていました。ある時おじいさんは漁をしていて「金のさかな」を捕まえたのですが逃がしてやりま

す。お礼に願いを叶えてやると魚は言うの



「金のさかな」はかなえてやるのでしたが、最後に出したお婆あさんの欲望をきくと……。国民的な詩人であり作家のプーシキンのこの作品はロシアの子どもたちに今も人気が高いそうです。

この3冊は読み聞かせに適していると思います。さて次は少し元気のいい女の子が主人公の物語を紹介します。

『雪の森のリサベット』(アストリッド・リンドグレン・文 イロン・ヴィークランド・絵 石井登志子・訳 1785円 徳間書店)



マディケンとリサベットは雪の中で一日楽しく遊んだのですが、マディケンが翌日熱を出してしまつたのです。この日は街ヘクリスマスプレゼントを

買い行く日です。それで、お手伝いさんのアルバとリサベットは二人で出かけました。

プレゼントを決めておもちゃ屋の外でアルバを待つていたら、そこへ薪を積んだソリがやってきたので、リサベットはソリの後ろに、おじいさんに気付かれずにぴよっこと飛び乗ったのです。

ところがソリは何処へましまらず街を抜け、森の奥へ走っていきます。リサベットは泣き出したので、ようやくおじいさんは気付きました。しかし、酔っぱらっていたおじいさんはリサベットをそこに残して行ってしまったのです。雪の森の中に一人残されたりサベットはどうするのでしょうか……。

この物語を読んで、マディケンとリサベットの物語が気に入って、もっと読みたいと思つたら、『おもしろ荘の子どもたち』と『川のほとりのおもしろ荘』が岩波書店から出ています。(但し現在版元品切れ中・ピッポに各一冊在庫有り)

今度は少し大きい子(小学校高学年・中学生) 向きの本を紹介しましょう。

『狐笛のかなた』(上橋菜穂子・作 1575円 理論社)



『守り人シリーズ』(既刊6巻 偕成社)で、人気がある上橋菜穂子さんの最新刊です。これもファンタジーで、日本の何時とは知れない時代と場所を舞台に作者の心に有る風景をよりどころに展開する物語。

主人公小夜が幼いとき助けた子ギツネ（野火）と、隔離されて育てられている小春丸の3人の運命的な出会いから始まり、後に小夜と野火は敵同士として再会するのであるが……。

『走れ、走って逃げる』（ウーリー・オルレブ・作 母袋夏生・訳 1890円 岩波書店）



これは第二次世界大戦下のポーランドのゲッ
ト（ドイツ軍
に押し込められ
たユダヤ人の強
制移住区）から
逃げ出した8才
のユダヤ人少年
の過酷な物語。

少年は自分の名前を変え、宗教までも
変えてドイツ軍から逃れる。途中雇われた農
家の作業中片手を失う事故に合ったり、時
にはドイツ軍に捕まったりしながらも、想
像を絶する過酷な中を、ある時は人の親切
に救われ、ある時は友情に助けられながら
希望を捨てずに生き抜き、戦後を迎えたの
です。

この物語は実際に体験した人の話を聞い
た作者が書いたのだという。

同じ第二次世界大戦を体験した我々日本
も、このような形で子どもたちに戦争が何
をもたらすのかを伝えることができている

のだろうか？今まさにイラクへの自衛隊派
遣という形で再び戦争加担を目前にした時
に、このことを強く思う。

今度は昔話集はいかがでしょう。昔話は
お話の原点。話の中に祖先が織り込んで、
わたしたちに伝えようとしてきた人間の知
恵の宝庫です。

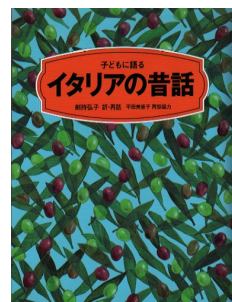
『ノルウェーの昔話』（アスビヨルセン
とモー編から エーリク・ヴェーレンシオ
ル・他絵 大塚勇三・訳 1680円 福
音館書店）



あの『3びきのやぎのらがらどん』を
伝えたノルウェー
は、海岸線をフィ
ヨルド地形に囲
まれ、内陸は森
と湖の厳しい自
然環境の国あり、
祖先をバイキン
グに持つ土地柄でもありますから、そこ
は、荒々しくも純朴な昔話が伝えられてき
ました。

話の多くは昔話の典型である3人の兄弟
や3人の姉妹が登場して、必ず「灰つつき」
などと言われる役立たずの末の弟が問題を
解決して幸せになる話が多く出てきます。
奇想天外な話やトロールや鬼が出てくるお
もしろい話など全部で34話収録

『子どもに語る イタリアの昔話』（剣
持弘子・訳再話 平田美恵子・再話協力
1680円 こぐま社）



北欧のノルウェーに続いて今度は南のイ
タリアの昔話。昔
話にはその土地の
自然環境などが色
濃く映し出される
もので、イタリ
アあの明るい陽光
を感じさせる色彩

鮮やかな昔話が15話

こぐま社からは「子どもに語るシリーズ」
として、「アイルランドの昔話」「トルコ
の昔話」「北欧の昔話」「アジアの昔話」
「日本の昔話」「グリムの昔話」などが出
ています。

最後にちよつと変わった本を紹介しましよ
う。『美によせることば』（ヘレン・エク



スレイ・編 中村妙子・訳
840円 偕成社）先人の
文学者・思想家の言葉が、
有名な絵画と共に編まれて

いる。テーマごとに4冊。縦 cmのミニ本

インフォメーション

年始年末は12月29日1月3日まで休みます
1月4日から営業いたします。
来年もどうぞよろしく願いたします。